啄木作品に見る20世紀初頭の道内生活

水　野　信太郎（北翔大学・北翔大学北方圏学術情報センター）

抄　　録

本稿は，明治期を代表する歌人の一人である石川啄木（いしかわ・たくぼく，1886～1912）の主として詩歌作品から，20世紀初頭1910年前後の日常生活を写し出そうとする試みである。具体的には盛岡，函館，札幌，小樽，釧路そして東京の各都市における日々の衣食住に関するものであるが，その中心は北海道内における生活である。特に北日本に特徴的な冬季間の厳しい寒さなどに注目している。

あわせて上記各地の都市景観・まちなみにも言及している。その視点は明治時代の近代化，西洋化，不燃化，高層化ほかである。以上のような論考が，今後の各地における固有の歴史や文化を前面に押し出した新しいまちづくりや地域振興策の契機となることを願っている。

キーワード：石川啄木，函館，小樽，釧路，衣食住

Ⅰ．は じ め に

筆者はこれまで建築学研究と近代文学と日本人の生活史という３分野の視点から，幾点かの論考[注1)]をまとめてきた。①建築学としては建築家と建築作品，②近代文学では建築界や美術界と文壇との交流，③そして生活史では文明開化ほか工学技術が人々の日常生活に及ぼした影響などへの関心を高めてきた。これらの中には，まちづくりへの視点も含まれており，文学・美術・建築が将来的に各地域の活性化に寄与することができるのではないかとの期待も込められている。

これまでに続いて本稿では以前からの研究を発展させ，石川啄木に焦点を当てた上で，現代から100年ほど前の日本人の日常生活を映し出すことを試みる。

Ⅱ．記録者としての石川啄木

明治時代の歌人・石川啄木（1886～1912）は，死の病と貧困のうちに妻子を残したまま，若くして他界した。そのような生前でありながら，死後には彼の作品と才能がきわめて高く評価されるようになった。

文学というジャンルの啄木とは違って絵画の世界ではあるが，後期印象派の画家フィンセント・ファン・ゴッホに関しても，その悲劇性には石川啄木との共通点が見られる。ゴッホについては小文ながら，彼のことを端的に紹介した事例がある。

> 世界で一番有名な画家かもしれないゴッホは，典型的な芸術家のイメージのひとつだ。彼を語るとき，あまりにドラマチックな人生のため，作品だけを独立させて冷静に語るのが難しくもなっている。確かに，彼の人生は，あまりの悲惨の連続で，涙するどころか，笑うしかなくなってしまうくらいだ[1)]。

ここでは上記のように「作品だけを独立させて冷静に語るのが難しい」と言う立場とは異なり，でき得る限り啄木作品を20世紀初頭における日本人の日常生活を記録した歴史的資料として扱うようにする。というのも啄木の作品には心理面での意図や表現上の誇張はあるものの，作歌の動機には日々の何気ない生活が常に存在していたからである。そのような背景を根拠として本稿では，100年前の本道ならびに国内各地での日常生活を，石川啄木の足跡と啄木作品の両面から掘り起こすという研究手法を採用する。

今日，啄木に対する高い評価は，なお継続している。特に本年（平成20年・2008年）は北海道最後の勤務地である釧路で居住したのち間もなく離道した年から，ちょうど100年目という年であった。やがて近い将来ほどなくして彼の没後100周年を迎えることになる。これらの事情から今後，石川啄木に関する一層の研究の継続や展開，さらに彼を主題あるいはモーメント・梃子とする各地のまちづくり活動が再燃・発展することが予想される。このような時期に，本研究の視点と成果が微力ながらも各地のまちづくりの一助となれば，本稿の意義もあると考える。

Ⅲ．啄木に関する近年の動き

石川啄木を巡るいくつかの動静が近年あった。それらの中でも，ここでは都市と建築物に関わる活動に触れる。

既に数年前の事となってしまったが，釧路市のまちづくりグループ[注2)]が啄木の在釧当時を偲ぶことの出来る歴史的資料の復刻作業を成し遂げた。それは啄木の離釧まもない２年後の明治43年に発行された大判地図を，カラー印刷で再現したものである。『釧路港實業家名鑑明細全圖[注3)]』と銘打たれたこの図は元来，当時の釧路で活動していた商工業者たちが発行したものである。このため地図の裏面には各店舗や事業所の広告が，全面にわたって割り付けられている。その広告主の中には，啄木が来店などをしてゆかりのあった複数の店舗が含まれている。

２番目は新しい地図が作成された。岩手県で発行された『盛岡啄木・賢治「青春の記憶」探求地図[注4)]』である。本図は石川啄木と宮沢賢治の二人が最終教育を受け青年時代を過ごした盛岡市内の地図で，両名の居住先などが地図上にプロットされたカラフルなものである。

この図は，もりおか啄木・賢治青春館として再利用されている旧第九十銀行の本店本館が，国の重要文化財に指定されたのを機につくられたという。旧第九十銀行の竣工は明治43年である。なお同建築作品に関してはロマネスク様式[注5)]と記述されることがある。確かに１階主出入口や２階の連続アーチが正半円で構成されている点などはロマネスク以来の特徴ではある。しかし筆者の判断するところコーナー・ストーンと石材仕上のテクスチュアーや作品全体の重々しさなどから，少し時代が下ったバロック的な要素を強く感じる。この銀行建築は前述の通り竣工年が明治末年である。したがって岩手県立盛岡中学校２年生であった宮沢賢治は目にしていると充分に考えられても，啄木が故郷でこの新しい建築物を見ることはなかった。

次の話題は，啄木の短歌が幾つも生まれる起因となった女性教師にかかわる記事[注6)]である。函館の弥生小学校元教員・旧姓橘智恵子のちの北村智恵子が嫁いだ先の北村牧場に立つ歌碑についてのリポートである。この記事なども啄木来道100年の前年のことであった。この智恵子を歌った作品[注7)]は多い。以下に４首ほど掲げる。

石狩の都の外の
君が家
林檎の花の散りてやあらむ[2)]

石狩の空知郡の
牧場のお嫁さんより送り来し
バタかな[3)]。

君に似し姿を街に見る時の
こころ躍りを
あはれと思へ[4)]

かの声を最一度聴かば
すつきりと
胸や霽れむと今朝も思へる[4)]

石川啄木来道100年目を迎えた昨年（平成19年・2007年）は，さまざまな報道がなされた。新聞以外でみれば，漂白の旅人・啄木に因んでか，鉄道会社が特集[注8)]を組んでいる。そこでは「函館」「札幌・小樽」「釧路」と定住した順に取り上げて，それぞれの都市ごとに啄木ゆかりの場所と歌を並べて編集している。

Ⅳ．啄木に関する本年の報道と動き

啄木は，ちょうど100年前の年頭に札幌をたち，岩見沢・旭川を経て釧路へ赴いた。家族を小樽に残したままの，いわば単身赴任であった。

子を負ひて
雪の吹き入る停車場に
われ見送りし妻の眉かな[5)]

という通りであった。

厳寒の旅，汽車に揺られる鉄路の途中で，印象的な光景をふと目にする。のちに彼は，その映像を生活感あふれる歌に仕上げた。

石狩の美国といへる停車場の
柵に乾してありし
赤き布片かな[6)]

という作品である。この光景を啄木自身が車中から見て丁度100年目ということで，啄木が誤って記憶した「美国」の正しい地名・駅名と考えられている美唄の地で展示会[注9)]が開催された。その会期は，平成20年７月23日（水）～８月24日（日）であった。

上記の会期中に新聞社が，北海道ではなく啄木の故郷を旅する紀行記事[注10)]を掲載した。現在では渋民村でも玉山町でもなく岩手県の県庁所在地である盛岡市内北部に含まれている，石川啄木の生誕地を訪ねる旅である。

写真－１　節子の井戸（2008年10月19日夕刻撮影）

盛岡市の都心に関する事項は小さく扱われている。

別の新聞報道では，新聞人[注11]としての石川啄木に焦点を当てた。ジャーナリストとりわけ新聞記者が，後年に文学者となった実例は数多い。それは現在に至ってもテレビ，ラジオ局などの放送記者ではなく，新聞記者から文筆業界への転身の方が多い。理由は，職場における社内教育と業務実践の両面で，新聞社が圧倒的に文章を書く訓練を継続しているからだと言われている。国民的文学者・石川啄木の誕生に際して，彼が新聞社に勤務し得たという事実は，代用教員という職を得た以上に大きな意味があったと考えられる。

その盛岡の中心部で新しい発見に基づく文化的な地域づくりの実践があった。啄木の妻であった旧姓堀合節子が産湯を使った井戸の復元である。

なお新聞紙上では，井戸を「復元」したと記載[注12]している。今回の事例に限れば，この「復元」という表記が，より望ましいと判断される。理由は「ふくげん」には復元と復原の双方が考えられるが，「復原」とする場合には木材などの古材あるいは発掘現場の地面に，旧状を示す痕跡があり，その痕跡を学問的根拠として竣工時の姿に復すことを意味するからである。この度の井戸は，その外観を決定する拠り所を古写真によっている。したがって，より厳密には当該記事の通り「復元」と書くのが適切と言えよう。復元された直後の「節子の井戸」を，写真―１に掲げる。場所は国立大学法人岩手大学農学部キャンパス内の温室の脇である。

岩手県盛岡市内で「節子の井戸」の復元行為が進められつつあった頃，小樽では１葉の古写真[注13]から大きな発見がなされた。石川啄木が勤務していた小樽日報社社屋の姿が明らかとなった。同建築に関しては従来，木造２階建て切妻屋根で外壁が下見板張りの建築物とされてきた。その根拠となった資料は，啄木研究家で後に盛岡図書館長になる吉田弧羊がまとめた文献に掲載された写真[注14]である。

吉田は同新聞社の所在地であった小樽市稲穂町を，おそらく昭和初年に訪れ，同地に建っていた遺構を撮影した。同社屋は啄木着任時に新築されたばかりであった事が知られていて20年程度の経年であるため，吉田が現地踏査の時点で残っていた建物を当該建築物であると判断する。

しかし小樽日報社は明治41年春に早くも廃刊し，それだけでなく同建築は大正末期に失火を出した。このため旧社屋自体が失われたと考えられる。吉田の写真に写った建築物は，焼失した跡地に建てられたものと判断される。他に拠り所がないため，小樽日報社の外観については吉田の写真だけが後世に影響を与えてきた。『切り絵　石川啄木の世界[注15]』も，その影響下にあった一例である。

Ⅴ．啄木と都市と建築

石川啄木は晩年まで，ついに自宅・持ち家を所有することなど到底できない貧しい一生を終えた。

はたらけど
はたらけど猶わが生活楽にならざり
ぢつと手を見る[7]

と短歌にしたほどである。

しかし現在，啄木が生活した建築物が６棟も残されている。その内訳は曹洞宗仏寺の庫裡が２棟（２室），学校建築が１棟，武家住宅が１棟，農家が１棟，店舗併用住宅が１棟である。これは極めて特殊な事例であるといえる。逆に日本を代表するような権力者や大富豪であっても，その住宅や生活の場が後世に残されることは多くない。啄木の事例は異例な幸運である。貧しさを嘆いて手のひらを黙って見詰めていた幸せ薄い人物の没後とは考え難い。

一方，啄木が生前にあって実際，目にした都市の景観は全て明治の姿である。その理由は，彼が明治年間最後の年に当たる明治45年（1912年７月30日以前）に死を迎えたからである。したがって啄木が生涯にわたって見た都市や集落の建築物について言えば，部分的に江戸期の建物も含まれようが，それらの大半は「明治建築」である。啄木の足取りを追体験して当時の建築物が現存していれば，それらは明治建築と言うことになる。

だが啄木が実見した可能性を指摘することができる現存遺構は，今日では極めてと言ってよいほど少ない。以下，彼が居住した土地ごとに歴史的建築物を確認する。

啄木が最初に来道した都市・函館[注16]には，都心の元

町に旧開拓使函館支庁書籍庫（明治13年竣工），函館市水道局元町配水場管理事務所（同22年竣工），旧金森洋物店（同13年），港沿いの旧遠藤吉平商店（同18以前），太刀川家住宅店舗（同34），旧田中仙太郎商店（同34），住まいがあった青柳町方面の函館公園一帯（同12），旧開拓使博物館一号（同12），同じく博物館二号（同17），旧函館麦酒会社醸造所（同31）の10棟程度に過ぎない。エキゾチックな観光都市として整備をし始めて久しいはずの函館にあっても，僅かに10棟である。

函館の青柳町こそかなしけれ
友の恋歌
矢ぐるまの花[8)]

この青柳町に啄木一家が住んでいた。彼は家から弥生小学校へ代用教員として通勤した。上記の建築物以外にも，啄木在函当時すでに竣工していた高龍寺（同33）や旧函館検疫所台町措置場（同18）もある。しかし，これらの所在地は船見町である。青柳町からは弥生小学校を通り過ぎて，更に岬側に位置している。通勤圏からも住まいからも遠く離れている。したがって啄木が船見町まで出かけたとは言い難い。都心から南側が，啄木にとっての函館「東海の小島の磯」であった。なお蛇足ながら付け加えると，啄木の代だけでなく石川家と青柳町は縁が深く，啄木の長女・京子が夫の石川正雄と暮らしたのも青柳町であった。

Ⅵ．啄木と道央の都市

函館の次に彼が道内で目にした都市は札幌[注17)]である。札幌駅南側に位置する都心には時計台（明治11），北海道庁舎（同21），旧開拓使札幌博物場のちの北海道大学附属植物園（同15ほか５棟），大通ぞいの豊平館（同13）があった。しかし大通以南の秋野総本店薬局（同34）や，東方向の旧札幌美以教会すなわち日本基督教団札幌教会（同37）そして札幌麦酒つまり現サッポロビールファクトリー（同25）は，下宿および職場から距離的に少し離れる。やはり札幌でも啄木が見た建築物は10棟余りしか残っていないと判断される。

ただし前述の豊平館は現在では中島公園内へ移築保存されているが，啄木の札幌時代には都心にあって大通公園に直接面していた。今日，市民会館とＮＨＫが占めているブロックである。その姿と東西方向に伸びる大通を撮影した航空写真が『北海道大觀[注18)]』という写真アルバムに見ることができる。この写真集は印刷物ではなく１枚１枚の白黒生写真を台紙に貼付している。写真の総数は34葉で，撮影地は道内全域に及ぶ。そのうちの第11葉目が「札幌市」と銘打った大通の映像である。

なお『啄木と札幌[注19)]』という別の文献には，当時の札幌駅前に存在した諸建築の位置図が掲載されている。今では大半が失われてしまった建築物群であるが，上述の図は有益な労作といえる。さらに解体されてしまった啄木の下宿跡の昭和50年前後の外観写真が『エピソード・北区[注20)]』に再録されている。

我が宿の姉と妹のいさかひに
初夜過ぎゆきし
札幌の雨[9)]

と作品で歌った姉妹がいた下宿である。

次は小樽[注21)]である。小樽の都心部から自宅のあった花園町付近に限定して現存建築物を検証する。中央小樽駅北口と小樽運河の間には，旧名取高三郎商店（明治39），旧島谷倉庫（同25），現在は小樽市立博物館として再利用されている旧小樽倉庫（同23～27），旧大家倉庫（同24），旧早川支店（同38），旧磯野商店倉庫（同39），旧北海道拓殖銀行小樽支店（同39），運河から外れるため上記の東側一帯に位置するものの程近い旧第百十三国立銀行小樽支店（同26），岩永時計店（同29），旧金子元三郎商店（同20）などがある。しかし，やはり10棟余りである。

上記のほか堺町・住吉町・入船あたりには旧木村倉庫，現在の北一硝子三号館（同24），猪股宅（同39），魁陽亭・海洋亭（同29以降），旧久米商店（同30頃），旧角江薬舗（同19頃）が残されているが，距離的に離れてしまう。また小樽運河西端の旧日本郵船小樽支店本館（同39），現ブルーハウス小樽店（同28～大正期），旧増田倉庫（明治36），旧日本郵船小樽支店残荷倉庫（同39）は，さらに遠過ぎるであろう。手宮機関車車庫（同18）に至っては尚更である。新聞記者として取材がない限り啄木が，これらの場所を歩いたとは言えない。

『啄木と小樽・札幌[注22)]』という書籍には，石川啄木一家の住居と啄木離樽後に残された家族が転居した住宅の地図がある。彼女らは花園町界隈を転々とした。

Ⅶ．啄木と他の道内都市

啄木が小樽を去って釧路へ向かう際，宿泊した町が２箇所ある。岩見沢と旭川である。１泊目は明治41年１月19日の夜，次姉トラの夫で岩見沢駅長の山本千三郎宅官舎に宿泊している。岩見沢[注23)]では駅付近ならば目にした可能性が認められる。旧北海道炭礦鉄道岩見沢工場材修場（明治32頃）は駅の裏側に位置しているが，列車への乗り降りの際に外観を眺めた可能性は高い。

写真－２　啄木新婚の家（2008年10月19日午前撮影）

２番目の旭川[注24]駅前には，かろうじて越後屋旅館（明治38）が前面道路からは見えない現状ながらも残存する。石川啄木が明治41年１月20日から翌21日にかけて釧路新聞社の社長・白石義郎と共に宿泊したのは，宮越屋旅館[注25]である。木造３階建て入母屋（いりもや）という歴史的な形状の屋根を構える，規模の大きな施設である。

石川啄木にとって北海道最後の地は釧路[注26]であった。現在の釧路市内に啄木来釧以前の建築で今なお姿を残している建築物は本当に少ない。まず間違いなく彼が見たであろうと目されるのは，今は「米町ふるさと館」となっている旧渡辺虎藏家住宅（明治33）だけである。この建築物の位置は，前述した明治末年の商工業地図に「米町七六　渡辺虎藏」と明示[注3]されている。

旧中川倉庫，現在の釧路倉庫の１番倉庫，２番倉庫，３番倉庫（いずれも同39頃）については，啄木との縁は薄いと考えられる。その理由は，それらの倉庫建築が幣舞橋よりも北側に位置している点にある。石川啄木にとっての釧路は，幣舞橋の南側だけであったとの説がある。確かに彼は住居と職場があった，市域の南端だけで生活していた。したがって啄木が，現存する煉瓦造の倉庫群を目にした可能性は大きくない。

さいはての駅に下り立ち
雪あかり
さびしき町にあゆみ入りにき[10]

と歌われた通りで，釧路に到着した時の交通機関は鉄道であった。したがって幣舞橋の北側から市街地へとアプローチした。しかし釧路を離れる際には，船で海路を選んでいる。石川啄木が釧路川右岸を歩き回ったことを私たちが確認することが出来る根拠は見つかっていない。

また釧路の浪花町十六番倉庫などは，啄木が東京で生きていた時期に竣工してはいるけれども，彼が離釧した後の建築である。つまり石川啄木時代の建築物は，釧路では極端に少ないというのが真実である。

勤務先である釧路新聞社の建物に関しては，実に残念であった。昭和40年まで残っていたにも関わらず，惜しい限りである。現在の「港文館」は残存していた設計図書に基づいて復元[注27]されたという。当初の場所ではなく，１ブロック北東側の釧路川左岸の水辺に面した箇所に再現された。

以上のように道内で石川啄木が見た可能性のある都市建築を概観した。その結果，次のような事実が明らかとなった。現存物件から判断する限り，来道した啄木は新築直後か新築後まもない状態の建物を目にしたことになる。それは北海道の代表的な４都市のいずれにおいても同様の事情で，新しい町並みが移住者・石川啄木を迎えたのであった。

さらに今回知ることが出来た内容は，啄木が見た建物の中には木造建築物よりも煉瓦造建築あるいは石造建築物が，思いのほか多く残されているという事実がある。このような現実は，不燃材料である煉瓦や石材を用いて，明治末年に道内の新しい都市の建設が広範になされていたことの証左といえよう。

石川啄木は北国の人であったため，壁厚が厚い組積造（そせきぞう）建築物に縁が深かった。煉瓦や石材を下から上方へ積み上げる西洋式の建築技術は，冬季の寒さが厳しい北日本においては有効な防寒手法でもあった。その上，和風の塗籠式（ぬりごめしき）土蔵も含め，壁の建築は火災に対しても有利である。以上の如く寒さにも火事にも耐えられる建築が残っている。それらが新築されたばかりの頃の北海道へ呼び寄せられるようにして啄木が渡って来たのである。

Ⅷ．道外の啄木ゆかりの都市

次は同様の方法で，道外の啄木ゆかりの都市と建築物を確認する。その際，現存する建築物だけではなく，現存しない建築物についても見ていくこととする。

石川啄木が盛岡市内に初めて住むのは渋民尋常小学校を卒業して盛岡高等小学校に入学した明治28年である。母カツの生家であり，母の兄・工藤常像（つねかた）の住まいがあった当時の仙北組町から，盛岡高等小学校までの通学路沿いには旧石井県令邸（明治19），徳清（同20前後）がある。都心からは少し東方へ外れるものの，大慈寺（同37）が啄木夫婦の新婚時代には新築されたばかりであった。以上は現存[注28]している。そして有名な「啄木新婚の家」も盛岡都心に残されている。啄木が「我が四畳半[注29]」と題して新婚当時の生活を記した住宅の外観を，

写真－２に掲げる。

失われてしまった盛岡の都市景観に関しては，盛岡市公民館がまとめた史料価値の高い写真集[注30]がある。第七十七国立銀行（同27），杜陵館（同23），啄木の母校である岩手県立盛岡尋常中学校のち岩手県立盛岡中学校（同18），妻・節子の母校で県内唯一のミッションスクール[注31]であった私立盛岡女学校（同25），盛岡高等農林学校（同36），盛岡駅（同23），盛岡郵便局（同39），盛岡市共同商社（同17）が，旧盛岡市内の歴史的建築物として掲載されている。

石川啄木にとって最期の町は，やはり東京であった。

東京の近代建築を扱った書籍は膨大にのぼる。そのうえ彼は長短合わせて４回の上京をしているので，どの時点での東京の景観に絞るべきか議論の余地がある。本稿においては小冊子ながら，啄木の足跡を追った記録の一例として『石川啄木と東京案内[注32]』にまず注目する。本書の冒頭には著者と金田一京助が，「石川啄木終焉の地」石碑前に並んで立つカラー写真が掲載されている。

その位置とは別の場所に，啄木没後の未亡人・節子が住んでいたという姿を，少年時代に見た詩人が短い文章を残している。それは金子光晴で，彼は

> 石川啄木がいつどんなことで死んだのか，それは私の小學校のころのことらしく，私の家が當時の牛込區新小川町にあった，その同町内のくぐり戸を入ったところにある小ぢんまりした家に，未亡人のせつ子夫人の標札が雨によごれ，時折り，そのころではまだめずらしい地味な洋服姿の彼女の出入りの姿をみかけた。近所の人の目はものみだかく，私の家のものまでなにかと噂して，そこの前を通ることは，『これが……』という特別な眼でみてすぎるのが子供の私にもわかった。夫人は，よくしらないが，どこかの學校の先生をして自活していられたもようである[11]。

ここに述べられている内容に，幾分かの記憶違いや幼い子供ゆえの誤解が含まれている可能性は認めなければならないであろう。今後とも慎重な検討が必要である。しかし，そのような事情を考慮しても，上記の記述は明治期の住宅街の光景を描写した資料として注目に値する。

近代の新しい建築分野での特徴は，一つは材料の不燃化であり，もう一つは高さ方向の拡張であった。勿論，近代化が西洋化そのものであった点はいうに及ばない。明治建築の不燃化は，赤煉瓦の登場が代表的な事柄であった。明治文化の代表は煉瓦だが，ここでは別に建物の高さが増えた事実に焦点をあてる。塔やタワーの出現である。背の高い塔は望楼建築として用いられるか，時計塔・時計台であった。時計は近代以降の庶民生活を一変させ，西洋式の時刻を司り表示した。啄木が見たであろう事が想定可能な東京の時計塔建築物には，以下を挙げることができる。

住まいのあった本郷界隈では辰野金後（たつの・きんご）設計の東京帝国大学工学部（明治21）[注33]，第一高等学校（同22）[注34]，中山時計店（同31）がある。ほかに東京帝国大学の医学部（同９）[注35]が古くなって老朽化が進んでいた。そのため明治43年ころに解体されたといわれるが，この年代は啄木自身の入院時期である同44年２月と微妙に前後する。

> ふるさとの訛なつかし
> 停車場の人ごみの中に
> そを聽きにゆく[12]

と歌った上野駅付近には，鈴木時計店（同30）があった。そして凌雲閣（りょううんかく・浅草十二階）が聳えていた歓楽街・浅草では，梅園館勧工場（同25）を見たことであろう。勧工場は「かんこば」ないし「かんこうば」と呼ばれたスーパーマーケットのような大型商業施設であった。このほか浅草には共営館勧工場（同27）が建っていたが，解体された時期が不詳（大正初めか）のため啄木自身が目にしたか否かあやうい。おそらくは見ているものと思われるけれども，現状では時代の整合性そのものの確認を得る手だてがない。

旧万世橋の北側，今の秋葉原駅西口（電気街口）にあたる外神田には京屋時計店（同９），神田には吉川時計店（同29頃）と南明館勧工場（同32）があった。日本橋では片山東熊（かたやま・とうくま）設計の江戸橋郵便局（同25），吉沼時計店（同26），同時計店の移転後の新築物件（同31），高木時計店（同35頃）の４例に関しては裏づけがとれる。しかし日本橋の小島時計店（同15）は，ちょうど解体の時期が来ていて明治43年か44年であった。逆に西浦陶器店は，日本橋で明治42年頃に新築されたという。おそらく啄木はこの新しい建築物を見ることができたであろう。

京橋から銀座にかけては時計塔が多く見られた。石川啄木が土岐哀果（善麿）と会った読売新聞社（同41），４丁目角の服部時計店（同27）[注36]，同じく４丁目の京屋時計店銀座支店（同９）の３棟があった。これらの他に小林時計店京橋支店（同14）も建っていたが，この建築物は同40年頃に解体されたと考えられている。

新橋の近くになるが博品館勧工場（同31）[注37]は有名であったから，おそらく彼も目にした事であろう。中央ステーション・東京駅から南側には東京府庁舎（同27）が

妻木頼黄（つまき・よりなか）の設計で建てられていた。

以上のように見てきた通り，時計塔の棟数は20棟前後にも及ぶ。これらの多くを石川啄木は眺めながら東京生活を過ごしていたことになる。東京の時計塔建築について言えることがある。啄木の晩年は，明治初年に竣工した時計塔が建て替えの時期に当たっていた。このため年代的には竣工年が古く，啄木の在京時期に既存建築として存在はしていたものの，彼が目にするよりも早く解体されてしまった建築物もあったと考えられる。

Ⅸ．啄木作品に見る衣生活

いよいよ本稿の主題である石川啄木の作品に登場する20世紀初頭の日常生活を見ていくことにする。ここでは生活の基本を衣・食・住として捉えることとする。衣類・服装が歌いこまれた短歌から始める。幼年時代には和装が，ごく一般的であった。いわゆる着物である。

大型の被布の模様の赤き花
今も目に見ゆ
六歳の日の恋[13]

ましてや往時の村祭の日にあっては，尚更のことに違いない。

ある年の盆の祭に
衣貸さむ踊れと言ひし
女を思ふ[14]

成人しても大半の日常では和服姿で過ごすことが多かった。

取りいでし去年の袷の
なつかしきにほひ身に泌む
初秋の朝[15]

その袷（あわせ）は衣替えによって，季節感を演出する衣類としての意味も有していた。

垢じみし袷の襟よ
かなしくも
ふるさとの胡桃焼くるにほひす[16]

肌着だけは時代的に早々と，洋風になりやすいという傾向がみられる。その理由は，上着全体を洋装で揃えることは金銭面で費用がかさむため，庶民へは比較的安価な肌着から普及する余地があったといえよう。

君来るといふに夙く起き
白シヤツの
袖のよごれを気にする日かな[17]

地方の人々が帝都・東京へ上京する際の服装も，やはり和服が多かった。仮に洋装であったとしても，やはり充分に着こなしていた時代ではなかった。そのようすが，

田舎めく旅の姿を
三日ばかり都に曝し
かへる友かな[18]

石川啄木自身は衣服に対する欲求が大きかったようである。

花散れば
先づ人さきに白の服着て家出づる
我にてありしか[19]

新しき背広など着て旅をせむ
しかく今年も思ひ過ぎたる[20]（原文は１行）

次の歌では東京暮らしをしている者が，玄冬の深夜にオーバーコートを着込んでいる。

外套の襟に頤を埋め，
夜ふけに立どまりて聞く。
よく似た声かな。[21]

同じく前述の

さいはての驛に下り立ち
雪あかり
さびしき町にあゆみ入りにき[10]

この歌は衣服の歌ではないけれども，その情景から着込んでいる主人公の姿が浮かぶ。厳寒の道東での冬季間の実態である。これと好対照を示している同時代の著名な文学作品がある。夏目漱石の『坊っちゃん』である。

（前略）船頭は眞つ裸に赤ふんどしをしめてゐる。野蛮な所多゛。尤も此熱さでは着物はきられまい。[22]（後略）

尤も驚ろい多のは此暑いのにフラン子ルの襯衣を

着て居る。（中略）し可も夫可゛赤シヤツ多゛可ら人を馬鹿尓してゐる[23]。

画学の教師は全久藝人風多゛。べらべらし多透縞の羽織を着て，扇子をぱちつ可せて，御国はどちらでげす，え？東京？夫りや嬉しい，御仲間可゛出来て…私も古連で江戸っ子ですと云つ多。古ん奈の可゛江戸っ子奈ら江戸尓は生れたく奈いもん多゛と心中に考へ多[24]。

それでも正装は洋服に移っていく。

教育可゛生きてフロツクコートを着ればお連に奈るん多゛と云はぬ許りの狸もゐる[25]。

教育者といえども私服は和装のようで，道後温泉へ行くのならば和服の着物が一般的である。

見連ば赤シャツ多゛。何多゛可べらべら然多る着物へ縮緬の帯を多゛らしな久巻きつけて，例の通り金鎖りをぶらつ可して居る[26]。

だが坊っちゃん自身は，いつも和服の生活であった。

とに可久赤シヤツの所へ行つて断はつて来な久つちあ気可゛済ま奈い。／　小倉の袴をつけて又出掛け多[27]。

つぎは履物である。まず素肌への履物から，

いつ見ても
毛糸の玉をころがして
韈を編む女なりしが[28]

この韈（くつした）は洋風のものと言える。なお毛糸の原料である羊毛の普及は近代以降のことで，軍服への需要からである。

よごれたる足袋穿く時の
気味わるき思ひに似たる
思い出もあり[29]

足袋（たび）は勿論，近世期以前からの伝統的な履物である。防寒の意味が大きかった。

わかれをれば妹いとしも
赤き緒の
下駄など欲しとわめく子なりし[30]

夜の家に入りて出でざる三人の
少女の下駄をもちてわれ逃ぐ[31]（原文は１行）

これらの下駄（げた）は草履（ぞうり）と並んで古くから日本人の土足として使用されてきた。どちらの履物にも緒（はなお）をすげて穿いた。

『坊っちゃん』にも履物の描写がみられる。

足元を見ると，畳付きの薄っぺら奈，のめりの駒下駄可゛ある[32]。

しかし近代の履物は，やはり靴である。

炎天の下わが前を大いなる靴ただ一つ牛のごと行く[33]

頭部へのかぶり物の中では帽子が代表的である。啄木の帽子姿としては，釧路新聞社前での集合写真が良く知られている。

六年ほど日毎日毎にかぶりたる
古き帽子も
棄てられぬかな[34]

今日も亦をかしき帽子うちかぶり
浪漫的が酒のみに行く[35]　（原文は１行）

帽子を描いた漱石作品には，『三四郎』がある。明治期には帽子が，現代の制服以上に当該個人の所属を社会的に明示する又は証明する機能を有していた。

「君は高等学校の生徒ですか」と聞いた。／　三四郎は，被つてゐる古帽子の徽章の痕が，此男の眼に映つたのを嬉しく感じた[36]。

学期の始まり際なので新らしい高等学校の帽子を被つた生徒が大分通る。野々宮君は愉快さうに，此連中を見てゐる[37]。

野々宮君の先生の何とか云ふ人が，学生の時分馬に乗つて，此所を乗り廻すうちに，馬が云ふ事を聞かないで，意地を悪くわざと木の下を通るので，帽子が松の枝に引つかゝる。下駄の歯が鐙に挟まる。先生は大変困つてゐると，正門前の喜多床と云ふ髪

結床の職人が大勢出て来て，面白がつて笑つてゐたさうである[38]。

また漱石の別の小説に，夏用の帽子が登場する。

「奥さん此帽子は重寶ですよ，どうでも言ふ事を聞きますからね」と拳骨をかためてパナマの横ツ腹をぽかりと張り付けると，成程意の如く拳程な穴があいた[39]。

この原作のパロディを漱石の長女・筆子の娘の夫が，別の作品に仕立てている。

さっそく大きな机の上に後生大事におかれていたパナマ帽を，恭々しくとりあげた。買いたてのほやほやである。これを被ってみるのが楽しみで水あぶらで整髪してきたものらしい[40]。

ただし御大がパナマ帽を欲したのはなにもこの夏に急に思い立ってというのではない。前年の大流行のときからの熱望があったことは，ちょうど一年前，まだ小説など書こうなんて野心を抱かなかったころの，御大の俳体詩なるものを読むとわかる[41]。

（前略）ふと膝元におかれている帽子に目をつけて「おや，パナマ帽が」と御大がいった。客はすぐさま「どうだい」と自慢げに御大と奥方の前に差し出す。奥方は「まあ綺麗ですこと。目が細かくて柔らかいんですね」と感嘆久しうして，「あなたの帽子と余っ程違いますわね。お高かったんでしょうね」[42]。

パナマ帽に限らず，啄木が釧路時代にも被っていた山高帽も含めて，明治期の帽子に関しては大正初期に図解入りの辞典[注38]が出版されている。またパナマ帽については『明治事物起原[注39]』という著名な事典に詳述されている。さらに同書には「夏帽子洗濯業の始[注40]」という事項もある。このようなサービス業が成立するほど，明治時代の人々は帽子を日常的に携えていたのである。

帽子をかぶることが紳士である条件のひとつであった一例を啄木自身が，詩の中で記している。

帽子もかぶらずに，
のそり〜と歩いて行つた丈の高い男よ[43]。

という作品である。帽子に関して最後に，啄木の「我が四畳半」より関連する部分を2箇所ほど引用しておく。

（前略）かの破れたる帽子の下に宇宙は包まれてありと[44]。

我が絳泥色（あかどろいろ）の帽子も亦（また），この壁上にあり。この帽子の我が頭にいたゞかるゝに至りてより満二年四ヶ月の歴史は，（後略）[45]

東京の夏季と異なり，とにかく北海道や樺太の冬の寒さは現代よりも相当に厳しかった。

わが妻に着物縫はせし友ありし
冬早く来る
植民地かな[46]

衣生活の最後は，寝具である。

すつぽりと蒲團をかぶり，
足をちぢめ，
舌を出してみぬ，誰にともなしに[47]。

Ⅹ．啄木作品に見る食文化

衣食住の2番目である食の分野には，食物と飲料がある。本稿では食事の面に焦点をあてる。啄木の作品には飲み物の酒と嗜好品の煙草が少なくないが，それらは別の機会に待ちたい。

それとなく
郷里のことなど語り出でて
秋の夜に焼く餅のにほひかな[48]

ある朝のかなしき夢のさめぎはに
鼻に入り来し
味噌を煮る香よ[49]

には，家族が集う食卓の風景と食生活が，的確に表現されている。

目の前の菓子皿などを
かりかりと噛みてみたくなりぬ
もどかしきかな[50]

そことなく
蜜柑の皮の焼くるごときにほひ残りて
夕となりぬ[51]

明治以降の食生活にあっては洋風化も浸透しつつあっ

た。具体的にはハム，パン，サラダ，ミルクなどの一般化である。

ひとしきり静かになれる
ゆふぐれの
厨にのこるハムのにほひかな[52]

或る時のわれのこころを
焼きたての
麺麭に似たりと思ひけるかな[53]

新しきサラドの皿の
酢のかをり
こころに泌みてかなしき夕[52]

空色の罎より
山羊の乳をつぐ
手のふるひなどいとしかりけり[52]

次の３首などは食だけでなく，都市や集落の風景も詠み込まれている。

飴売のチヤルメラ聴けば
うしなひし
をさなき心ひろへるごとし[54]

はたはたと黍の葉鳴れる
ふるさとの軒端なつかし
秋風吹けば[55]

しんとして幅広き街の
秋の夜の
玉蜀黍の焼くるにほひよ[56]

この通り北国の風が吹き渡る印象の強い石川啄木に比して，夏目漱石の食べ物の描写は「明るい」というべきかむしろ「軽い」と評すべきであろうか。

ある日の晩大町と云ふ所を散歩して居多ら郵便局の隣りに蕎麦と可いて，下に東京と注を加へ多看板可゛あつた。お連は蕎麦が大好きである[57]。

生卵でも榮養をとら奈久つちあ一週二十一時間の授業可゛出来るもの可[58]。

淀見軒と云ふ所は店で果物を売つてゐる。新らしい普請であつた。ポンチを画いた男は此建築の表を指して，是がヌーボー式だと教へた。三四郎は建築にもヌーボー式があるものかと始めて悟つた[59]。

咽喉がかわき，
まだ起きてゐる果物屋を探しに行きぬ。
秋の夜ふけに[60]。

Ⅺ．啄木作品に見る住まいと建築

石川啄木は，いわば一家揃って家を追われた子であった。おそらくこの理由からであろう，一般の人たちが募らせる以上に，家宅や屋敷群や地元への強い思いを抱いていたようすがある。そして彼はその願望が強くなるほど，半面では心の苛立ちを高めてしまう。

飄然と家を出でては
飄然と歸りし癖よ
友はわらへど[61]

父のごと秋は嚴し母のごと秋はなつかし
家持たぬ子に[62]（原文は１行）

ひとところ，疊を見つめてありし間の
　その思ひを，
妻よ，語れといふか[63]。

こつこつと空地に石をきざむ音
耳につき来ぬ
家に入るまで[16]

ひやひやと
夜は薬の香のにほふ
医者が住みたるあとの家かな[64]

気ぬけして廊下に立ちぬ
あららかに扉を推せしに
すぐ開きしかば[65]

逆に上のようないらいらした感覚とは全く違って，都市景観つまり，町並みを見渡すときの清清しさと感傷も持ち合わせていた。

ひとならび泳げるごとき
家家の高低の軒に
冬の日の舞ふ[66]

雨後の月

ほどよく濡れし屋根瓦の
そのところどころ光るかなしさ[67]

赤煉瓦遠くつづける高塀の
むらさきに見えて
春の日ながし[34]

よごれたる煉瓦の壁に
降りて融け降りては融くる
春の雪かな[68]

雪のなか
処処に屋根見えて
煙突の煙うすくも空にまよへり[69]

バルコンの欄干に凭りて酸漿を吹く娘あり銀座の
夕[70]（原文は１行）

椽先にまくら出させて，
　ひさしぶりに，
　ゆふべの空にしたしめるかな[71]。

こと〳〵と羽目板を蹴る眞夜中の馬の灯を見る
まなざしもよし[72]（原文は１行）

それにしても失ってしまった有形無形の品々への思いは，やはり極めて大きかった。

ふるさとの寺の御廊に
踏みにける
小櫛の蝶を夢にみしかな[73]

盛岡の中學校の
露臺の
欄干に最一度我を倚らしめ[74]

知らぬ家たたき起して
遁げ来るがおもしろかりし
昔の恋しさ[75]

建築物や住宅に用いられる明かり・照明器具の変遷も，近代化の重要な指標である。

真白なるランプの笠の
瑕のごと
流離の記憶消しがたきかな[76]

（前略）ランプの笠の真白きにそれとなく眼をあつむれば，／その家に住むたのしさの（後略）[77]

フランスの画家アンリ・ルソーは，ランプと少なからぬ縁を持ってこの世に生を受けた。彼の家は祖父と父親が２代続けて明かり用のランプを手づくりする職人であった。ケンケ燈[注41]などと呼ばれた明かりをつくるブリキ屋であった。ただし上記の短歌はガラス製のランプを歌っている。

赤シャツの自邸では夜分の来客に対して，玄関までランプを下げて出てくる。

しばら久すると，赤シヤツ可゛，ランプを持つて玄関迄出て来て，まあ上可゛り給へ[78]，

一方，東京の大久保では住民は「ちょうちん」を点して夜道を歩く。

半町程くると提燈が留つてゐる。人も留つてゐる。人は灯を翳した儘黙つてゐる。三四郎は無言で灯の下を見た[79]。

その照明方法によって時代の新旧を明瞭に区別しようとする発想が披瀝される。

「小川君，君は明治何年生れかな」と聞いた。三四郎は単簡に，／　「僕は二十三だ」と答へた。／　「そんなものだらう。―先生僕は丸行燈だの，雁首だのつて云ふものが，どうも嫌ですがね。明治十五年以後に生れた所為かも知れないが，何だか旧式で厭な心持がする。君はどうだ」と又三四郎の方を向く。三四郎は，／　「僕は別段嫌でもない」と云つた。／　「尤も君は九州の田舎から出た許だから，明治元年位の頭と同じなんだろう[80]」

この論法によれば，石川啄木は新しい世代の人間だということになる。

「先生冗談云つちや不可ません。なんぼ九段の燈明台が旧いたつて，江戸名所図会に出ちや大変だ」／　広田先生は笑ひ出した。実は東京名所と云ふ錦絵の間違だと云ふ事が解つた。先生の説によると，こんなに古い燈台が，まだ残つてゐる傍に，階行社と云ふ新式の錬瓦作りが出来た[81]。

大学では，さすがに提燈などではなく，またランプで

もない。近代的な電気の白熱灯になっている。

　筆記をするには暗過ぎる。電燈が点くには早過ぎる。（中略）所へ電燈がぱつと点いて，万事が稍明瞭になつた[82]。

ダイナモの
重き唸りのここちよさよ
あはれこのごとく物を言はまし[83]

京橋の滝山町の
新聞社
灯ともる頃のいそがしさかな[84]

近代の明るさと先進性を正面から表出する素材は，ガラスである。下の作品には食もあるが，窓ガラスが登場している。

わかれ來て
燈火小暗き夜の汽車の窓に弄ぶ
青き林檎よ[85]

やはり列車の車窓のガラス窓，

雨つよく降る夜の汽車の
たえまなく雫流るる
窓硝子かな[86]

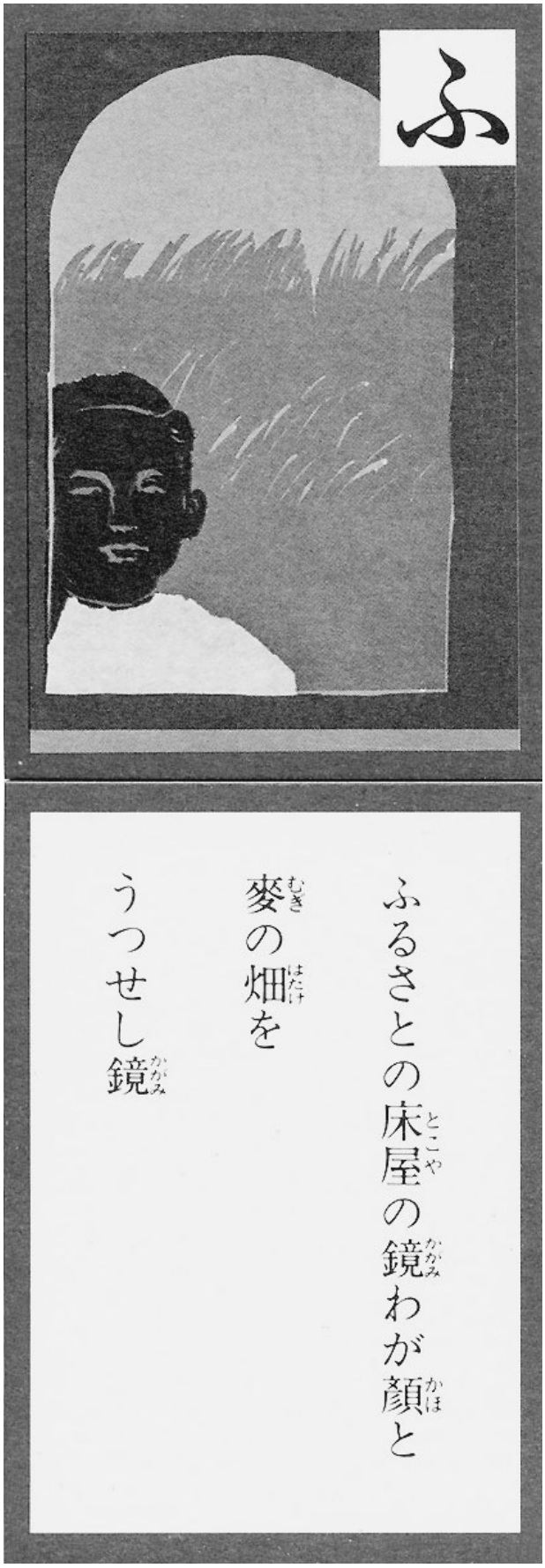
板ガラスは鏡の素材ともなる。晩年，床屋の２階に居住することになる石川啄木は床屋にまつわる歌（写真－３参照）もつくっている。

ふるさとの床屋の鏡わが顔と
麥の畑を
うつせし鏡[87]

歴史的な建築物への関心は，夏目漱石も大きかった。

　所へ汽車が轟と鳴つて孟宗藪のすぐ下を通つた。根太の具合か，土質の所為か座敷が少し震へる様である。／　三四郎は看病をやめて，座敷を見廻した。いか様古い建物と思はれて，柱に寂がある。其代り唐紙の立附が悪い。天井は真黒だ。洋燈許が当世に光つてゐる[88]

啄木作品には死の香り，あるいは死への誘いを予感させるものが目についてしまうが，人の死への不安と遺族



写真－３　ふるさとの床屋の鏡
「啄木いろはかるた」より

にとって日常生活の継続を直接むすびつけた社会的な解決策が生命保険という制度である。

大といふ字を百あまり
砂に書き
死ぬことをやめて帰り来れり[89]

いたく錆びしピストル出でぬ
砂山の
砂を指もて掘りてありしに[90]

その死という問題が，漱石の初期のユーモラスな作品では

その談判を蔭で聞いて居ると，本當に面白いのよ。成程保險の必要も認めないではない。必要なものだから會社も存続して居るのだらう。然し死なゝい以上は保險に這入る必要はないぢやないかつて强情を張つて居るんです（中略）大丈夫僕は死なない事に決心をして居るつて，まあ無法な事を云ふんですよ[91]

一方，石川啄木のふるさとという地域社会への思いは，晩年に至って強くなるばかりであった。

今のうちに，
忘れぬうちに，
故郷の村の地圖を書いて置かんと思ひ立ちたる。[92]

病のごと
思郷のこころ湧く日なり
目にあをぞらの煙かなしも[93]

最後に花を歌った作品群である。都市の生活にあっても，郡部に住む人々にとっても花たちが心の慰めであった事実は変わらない。これは何も20世紀の初頭に限ったことではなかった。

馬鈴薯の花咲く頃と
なれりけり
君もこの花を好きたまふらむ[94]

友がみなわれよりえらく見ゆる日よ
花を買ひ来て
妻としたしむ[95]

20世紀初頭とは限らない，長い時間的スパンを乗り越えて意義をもち得る作品が石川啄木には多くあることも明言しておきたい。たとえば下の歌によって今や「渋民村」は，すべての人々の故郷となっているのではないのかと強く感じられる。

ふるさとの山に向ひて
言ふことなし
ふるさとの山はありがたきかな[96]

Ⅻ．む　す　び

以上，本研究を通して石川啄木が，いかに広範な生活記録を文学作品として創作していたかを指摘することが出来た。啄木作品は北海道と東北の盛岡と首都・東京における20世紀初頭の庶民生活を映し出すことが出来るあるいは映し出すための契機となり得る貴重な記録文学である。

明治時代半ばに東北地方北部の山あいに生を受け，当時日本の鉄道網で最も東端に位置した釧路へ開通間もない鉄路を乗り継いで辿り着いた石川啄木であった。そして彼は，明治最後の年に帝都の片隅で早世する。

啄木が目にし歌った生活文化の世界は，日本の近代化の一側面を捉えている。しかも石川啄木は東北の小村だけでなく，開拓の最前線であった寒さの北海道や近代化・商業化の頂点でもあった東京銀座をも見ている。啄木自身その場所場所で生活をした。道内では函館の大火を経験し，同じく札幌駅を焼失し焼け出された直後の札幌でも過ごした。また金銭を稼ぐばかりの仕事に明け暮れ文化性を忘れた「歌ふことなき」小樽の人々を目の当たりにし，さいはての終着駅・釧路で凍えた。

今後は啄木作品の歴史的資料としての価値を評価する視点が，より一層大きくなって良いものと考える。そのような再評価の動きによって，石川啄木が歌った都市のまちづくりにも新しい方向性が生まれることを期待したい。

本研究をまとめるに際して多くの方々から，さまざまな御指導とお力添えを頂戴した。釧路公立大学学長を御自身が務めた時期以降に啄木の短歌を英訳し始められた北海道労働文化協会の荒又重雄先生，財団法人石川啄木記念館の嶋千秋館長ならびに山本玲子学芸員，盛岡第一高等学校卒業生の佐々木茂喜博士（医学），岩手大学の岡田幸助先生，同じく岩手大学ミュージアム解説ボランティア佐々木三代四氏，そして湘南啄木文庫の佐藤勝様，美唄市郷土史料館の田島孝雄氏ほかの方々である。さらに拙稿を査読して下さった先生ならびに本研究紀要『北方圏学術情報センター年報』編集委員の先生方に，この紙面を拝借して謝意を表する次第である。

引用文献

1）視覚デザイン研究所・編集部：「ゴッホ　自由な色で自分を表現した画家」，視覚デザイン研究所・編集部：『巨匠に教わる絵画の見かた』，Ｐ－104,視覚デザイン研究所，1996年（平成８）10月15日
2）久保田正文編：『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－133，岩波書店，1993年５月17日
3）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－181
4）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－131
5）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－114
6）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－109
7）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－43
8）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－103
9）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－109
10）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－120
11）金子光晴：「啄木のことなど」：『明治文學全集　月報56』，Ｐ－1,筑摩書房，1970年（昭和45）３月
12）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－70
13）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－76
14）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－75
15）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－152
16）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－45
17）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－146
18）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－66
19）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－62
20）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－320
21）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－181
22）夏目漱石：『直筆で読む「坊っちゃん」』，Ｐ－93,集英社（集英社新書ヴィジュアル版〇〇六Ｖ）2007年10月22日
23）前掲『直筆で読む「坊っちゃん」』，Ｐ－104
24）前掲『直筆で読む「坊っちゃん」』，Ｐ－106
25）前掲『直筆で読む「坊っちゃん」』，Ｐ－238
26）前掲『直筆で読む「坊っちゃん」』，Ｐ－240
27）前掲『直筆で読む「坊っちゃん」』，Ｐ－266
28）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－154
29）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－127
30）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－71
31）石川啄木：『日本の詩歌　５　石川啄木』，Ｐ－206,中央公論社，昭和42年10月16日
32）前掲『直筆で読む「坊っちゃん」』，Ｐ－267
33）前掲『日本の詩歌　５　石川啄木』，Ｐ－207
34）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－139
35）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－301
36）夏目金之助：「三四郎」,『漱石全集　第五巻』，Ｐ－286,岩波書店，1994年４月11日
37）前掲「三四郎」,『漱石全集　第五巻』，Ｐ－306
38）前掲「三四郎」,『漱石全集　第五巻』，Ｐ－312
39）夏目漱石：「吾輩は猫である　上」,『漱石全集　第一巻』，Ｐ－186,岩波書店，1956年９月27日
40）半藤一利：『漱石先生がやって来た』，Ｐ－51,日本放送出版協会，1996年５月21日
41）前掲『漱石先生がやって来た』，Ｐ－52
42）前掲『漱石先生がやって来た』，Ｐ－54
43）前掲『日本の詩歌　５　石川啄木』，Ｐ－371
44）石川啄木：『NOTE　BOOK　盛岡啄木手帳　閑天地・時代閉塞の現状・渋民日記など』，Ｐ－15,盛岡啄木手帳刊行委員会，平成20年10月14日
45）前掲『NOTE　BOOK　盛岡啄木手帳　閑天地・時代閉塞の現状・渋民日記など』，Ｐ－23
46）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－112
47）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－180
48）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－72
49）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－44
50）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－36
51）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－

141
52）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－143
53）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－47
54）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－72
55）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－90
56）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－109
57）前掲『直筆で読む「坊っちゃん」』，Ｐ－123
58）前掲『直筆で読む「坊っちゃん」』，Ｐ－236
59）前掲「三四郎」，『漱石全集　第五巻』，Ｐ－314
60）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－167
61）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－21
62）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－279
63）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－207
64）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－138
65）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－48
66）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－148
67）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－92
68）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－140
69）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－119
70）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－324
71）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－215
72）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－289
73）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－89
74）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－63
75）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－31
76）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－129
77）前掲『日本の詩歌　５　石川啄木』，Ｐ－386
78）前掲『直筆で読む「坊っちゃん」』，Ｐ－267
79）前掲「三四郎」，『漱石全集　第五巻』，Ｐ－332
80）前掲「三四郎」，『漱石全集　第五巻』，Ｐ－354
81）前掲「三四郎」，『漱石全集　第五巻』，Ｐ－355
82）前掲「三四郎」，『漱石全集　第五巻』，Ｐ－356
83）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－33
84）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－149
85）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－151
86）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－108
87）石川啄木：『啄木いろはかるた』河出興産，発行年記載なし
88）前掲「三四郎」，『漱石全集　第五巻』，PP.329－330
89）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－20
90）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－18
91）夏目漱石：「吾輩は猫である　下」，『漱石全集第二巻』，Ｐ－133，岩波書店，1956年10月12日
92）前掲『日本の詩歌　５　石川啄木』，Ｐ－236
93）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－58
94）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－130
95）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－49
96）前掲『新編　啄木歌集　岩波文庫　緑54－１』Ｐ－83

注

注１）拙稿：「日本近代における建築界と文壇の人的交流（その１）」，金沢学院大学経営情報学部：『金沢学院大学経営情報学部紀要』，Vol.1，No.1，PP.73-84，金沢学院大学，1996年３月．この文献の復刻版「日本近代における建築界と文壇の人的交流（その１）」，学術文献刊行会：『国文学年次別論文集『近代Ⅰ』（平成８年）』，PP.737-743，朋文出版，1998年（平成10）11月．

拙稿：「日本近代における建築界と文壇の人的交流（その２）」，北海道女子大学短期大学部：『北海道女子大学短期大学部研究紀要』，第37号，PP.43-54，北

海道女子大学，1999年11月
拙稿：「煉瓦博士のミニ講座58　啄木と煉瓦」，立花恒平：『輪環』，第58号，Ｐ－3,赤煉瓦ネットワーク，2006年１月25日
拙稿：「旧渋民小学校と本郷喜乃床（啄木ゆかりの建築物　1）」，日本建築学会北海道支部研究発表実行委員会：『日本建築学会北海道支部研究報告集』，No.80,PP.347-350,日本建築学会北海道支部，2007年７月
拙稿：「地域振興装置としての石川啄木」，北翔大学生涯学習研究所：『北翔大学生涯学習研究所研究紀要　生涯学習と実践』，第11号，PP.155-170,北翔大学，2008年３月
注２）「新興釧路　息吹今に／90年前の多色地図復刻／裏面に広告148店　啄木ひいきの料亭，旅館も」，北海道新聞社：『北海道新聞　夕刊』，北海道新聞社，2002年11月12日
注３）坂本留吉：『釧路港實業家名鑑明細全圖』，釧路商業新報社，1910年（明治43）６月５日．この復刻版は『釧路港實業家名鑑明細全圖』，釧路地方の地名を考える会，2003年（平成15）４月
注４）文化地層研究会：『盛岡啄木・賢治「青春の記憶」探求地図』，文化地層研究会，2004年（平成16）９月21日
注５）岩手県建築士会：『建築・いわて紀行』，PP.170-175,岩手県建築士会，1987年（昭和62）10月１日
注６）月刊アイワード編集委員会：「ふるさとこぼれ話(2)　鹿子百合の碑　啄木が二十余首を捧げた女性／牧場の石碑が伝える歌人の恋」，アイワード：『月刊アイワード』，通巻305号，PP.6-7,アイワード，2006年11月１日
注７）宮本吉次：『啄木の歌とそのモデル』，PP.29－44,新興音樂出版社，1941年（昭和16）10月５日
注８）北室かず子：「百年の旅人，石川啄木／～「忘れがたき人人」と北の風景～」，千葉律雄：『The JR　Hokkaido』，通巻229号，PP.5－11,北海道ジェイ・アール・エージェンシー，2007年３月１日
注９）美唄市郷土史料館：『第62回特別展　漂白の歌人・石川啄木　～美唄通過100年を記念して～』，美唄市郷土史料館，2008年７月．啄木の記憶違いに関しては岩城之徳：『定本　石川啄木歌集』，Ｐ－237,學燈社，1964年（昭和39）３月31日および岩城之徳：『短歌シリーズ人と作品　10　石川啄木歌集』，Ｐ－154,おうふう（桜楓社），1980年（昭和55）４月５日
注10）「日曜navi　旅「啄木の里」」，北海道新聞社：『北海道新聞』，PP.1－2,北海道新聞社，2008年８月17日
注11）「新聞週間・新聞大会特集「新聞記者　石川啄木」記者啄木　道内流転」，北海道新聞社：『北海道新聞』，PP.2-3,北海道新聞社，2008年10月14日
注12）「井戸の復元を祝う／啄木の妻　節子の生家　122回目の誕生日を祝う／岩手大学構内で除幕式」，盛岡タイムス：『盛岡タイムス』，Ｐ－9,盛岡タイムス，2008年（平成20）10月15日
注13）「小樽日報社は「立派なる事本道中一番」／啄木の手紙　本当だった／建物の新たな写真発見」，北海道新聞社：『北海道新聞　夕刊』，Ｐ－1,北海道新聞社2008年11月８日
注14）吉田孤羊：『啄木寫眞帖』，Ｐ－151，改造社，1936年（昭和11）６月24日
注15）岩城之徳・後藤伸行：『切り絵　石川啄木の世界』，Ｐ－52,ぎょうせい，1985年（昭和60）11月15日
注16）函館建築研究会／函館の歴史的風土を守る会：『函館の建築探訪』，PP.15-91,北海道新聞社，1997年９月25日
注17）北海道近代建築研究会：『札幌の建築探訪』，PP.17－53,北海道新聞社，1998年10月30日
注18）北海道庁（写真撮影は三春フォトステュディオ）『北海道大觀』，Ｐ－11,北海道庁，昭和５年か（奥付が印刷されていない）
注19）木原直彦：『啄木と札幌　－石川啄木記念像建立記念誌－』，PP.8-9,石川啄木記念像設立期成会，1981年（昭和56）９月14日
注20）北区エピソード史編集委員会：「漂泊の札幌二週間　啄木下宿」，札幌市北区役所市民部総務企画課：『エピソード・北区』，PP.97-99,札幌市北区役所市民部総務企画課，2007年３月
注21）小樽再生フォーラム：『小樽の建築探訪』，PP.20-126,北海道新聞社，1995年８月25日
注22）小樽啄木会：『啄木と小樽・札幌』，Ｐ－1,みやま書房，1976年（昭和51）10月20日
注23）　北海道近代建築研究会：『道南・道央の建築探訪』，Ｐ－142,北海道新聞社，2004年11月19日
注24）北海道近代建築研究会：『旭川と道北の建築探訪』，PP.30-31,北海道新聞社，2000年11月５日
注25）前掲『啄木寫眞帖』，Ｐ－165
注26）北海道近代建築研究会：『道東の建築探訪』，PP.69-73,北海道新聞社，2007年５月24日
注27）永田秀郎・北海道新聞社：『釧路　街並み今・昔』，PP.64-65,北海道新聞社，2005年６月30日．拙稿：『釧路新聞社』，北海道近代建築研究会：

『道東の建築探訪』，Ｐ－129,北海道新聞社，2007年５月24日
注28）前掲『盛岡啄木・賢治「青春の記憶」探求地図』ならびに前掲『建築・いわて紀行』，PP.197-198
注29）『NOTE　BOOK　盛岡啄木手帳　閑天地・時代閉塞の現状・渋民日記など』石川啄木，盛岡啄木手帳刊行委員会，平成20年10月14日，PP.15-33
注30）吉田義昭：『郷土資料写真集　第14集　目で見る盛岡今と昔』，PP.236-279,盛岡市公民館，発行年記載なし（1971年・昭和46か）
注31）岩城之徳：『人物叢書　62　石川啄木』，Ｐ－62,吉川弘文館，1961年（昭和36）２月15日
注32）大里雄吉：『石川啄木と東京案内』，1977年（昭和52），大里雄吉
注33）平野光雄：「東京大学工学部時計塔」，平野光雄：『明治・東京時計塔記』，PP.140-143,明啓社，1968（昭和43）年６月10日
注34）平野光雄：「第一高等学校時計塔」，前掲『明治・東京時計塔記』，PP.144-147
注35）平野光雄：「東京大学医学部時計塔」，前掲：『明治・東京時計塔記』，PP.96-104
注36）平野光雄：「服部時計店時計塔」，前掲『明治・東京時計塔記』，PP.171-176
注37）平野光雄：「博品館勧工場時計塔」，前掲『明治・東京時計塔記』，PP.196-199
注38）杉山新：「帽子」，『大日本百科辭書　工業大辭書』，PP.3680-3681,同文館，1913年（大正２）９月14日．この文献の復刻版「帽子」，『工業大辭書　第四巻』，PP.3680-3681,日本図書センター，2000年10月25日
注39）石井研堂：「明治時代の夏帽子」，『増補改定　明治事物起原　下巻』，Ｐ－1357,春陽堂，1944年（昭和19）12月28日，この文献の復刻版「明治時代の夏帽子」，『明治事物起原７（全八冊）』，PP.524-526,筑摩書房，1997年11月10日
注40）石井研堂：「夏帽子洗濯業の始」，前掲『増補改定　明治事物起原　下巻』，Ｐ－1482,この文献の復刻版「夏帽子洗濯業の始」，『明治事物起原８（全八冊）』，PP.277-278,筑摩書房，1997年12月10日
注41）岡谷公二：『平凡社ライブラリー　590　アンリ・ルソー　楽園の謎』，PP.12-14,平凡社，2006年10月10日

The Daily Lives of People in Hokkaido in the early 20th Century in the Works of Takuboku Hajime Ishikawa

Shintaro MIZUNO Hokusho University Hokusho University Northern Regions Academic Information Center

Abstract

Takuboku Hajime Ishikawa (1886-1912) is one of some as famous literature and poet in the early 20 th century in Japanese modern period. This paper was meant to report on clothing, food, shelter and town architecture in the works of Takuboku Hajime Ishikawa. This paper demonstrated the daily lives of people in some cities in Japan in the Meiji era by observation research and field survey.